

セッションV

慢性疾患患者の家族への支援とチーム連携

座 長／報告者：土屋 陽子（岩手県立大学看護学部）
 報告者：三浦幸枝（岩手医科大学附属病院看護部, 主任看護師）
 小原美由紀（岩手医科大学附属病院栄養部, 管理栄養士）

【土屋 陽子（岩手県立大学看護学部）一病院外専門家の立場から一】

慢性疾患の多くは末期になるまで障害を患者本人が自覚しづらいものが多く、ましてや家族にとっても把握しづらい状況にあります。合併症や障害を進展させないよう疾病をコントロールするには、現時点では自覚症状がなくとも、将来のことを予測して、病気が悪化しないよう生活全般を変更、工夫していくことが必要になります。しかし、慢性疾患のうち、長年の習慣を変えることにより、疾病のコントロールができるようにしていくことが求められる生活習慣病では、その変化は生活そのものに密接に関連した事柄について求められるため、患者本人のみではうまくコントロールできないか、長続きしないことがしばしば見られます。家族のサポートの有無が疾病のコントロール状態に大きく関連するとも言われています。コントロール不良の場合、その原因は患者本人の意欲、努力の不足によると見られがちで、やらなくてはいけないと「わかっているのにできない」本人が悪いと一方的に患者が責められることが多く、家庭内で叱責を受け、懇願され続けることになってしまいます。長期間に渡り改善しないと叱責、懇願はあきらめ、無視、あるいは共依存という状況になってしまい、家族関係がこじれて修復が困難な状況になってしまう患者家族を時には見かけます。長年病院スタッフと協働して療養相談にあたる病院外専門家の立場から、主に糖尿病で長期コントロール不良状態にある患者への関わりを持ってきました。その中で患者本人のみでは解決できない問題を、主治医、病院看護師、管理栄養士、訪問看護部門看護師等と連携しつつ、時には家庭訪問も行いながら患者の疾病コントロールと生活の建て直しを図るべく、活動してきた経験を交えて慢性疾患患者の家族へのケアを述べていきたいと考えています。

【三浦 幸枝（岩手医科大学附属病院）一外来看護師の立場から一】

私は、特定機能病院としての大学病院において、内科外来の主任看護師として走り回って働いてきた中で、患者を取り巻く家族の形態や機能が変化し、多様化してきていると感じている。慢性疾患の理解には家族を視野に入れる必要があり、家族が上手く患者をサポートするには、家族と患者が共に担うような自己管理ができるよう支援が必要と考える。慢性疾患である、糖尿病患者の看護の拠点は病棟から外来へとシフトしつつある。患者の家族がもつ共感や問題対処能力が患者の「上手くやっとういこう」という気持ちに大きな影響を及ぼし、コントロールを良好にするため、私たちは目の前の患者の日常生活を見つめ患者の生き方を重視し支援している。高齢者夫婦でも協力インスリン注射を行うなど、私たちが無理だろうと思っても家族は意外なパワーを秘めているものである。しかし、外来という時間的な制約がある中で、患者と家族の関係性や家族の機能をどの様に評価したらよいか困難な感情を持ちながらの看護実践である。外来での慢性疾患患者家族への援助は、看護師間での情報の共有、医師との調整役、家族との時間調整、家族の拠り所となって、共にいるという存在を示し、タイミングよく支援できるような継続した体制が重要であると思われる。今回私がかかわった事例について振り返りながら今後の指導や支援のあり方について、ご意見やご助言をいただきたい。

【小原 美由紀（岩手医科大学附属病院栄養部）一管理栄養士の立場から一】

平成18年度の診療報酬改定により病棟での管理栄養士による栄養管理を目的とした栄養管理実施加算が新設され、それまでと異なり患者さんの話を聞き、話をする機会が大幅に増えました。今まで行った栄養指導の依頼内容の多くは、糖尿病、胃摘出術後、腎疾患です。特に多いのが糖尿病、中でも2型糖尿病の患者さんです。患者さんの年齢は20代～80代と幅広く生活スタイルも様々で、教えるというよりは、まず話を聞いて理解することが必要だと考えました。今までの食事摂取状況を思い出させて、どの位の摂取量なのかを見つけるのですが、同時に思い出させることで患者さんから気付いてもらう、自ら小さなことでもいいので目標を持ってもらうことが理想です。実際指導を行って見て、高齢者が多く、1人暮らしまたは自ら糖尿病をかかえながらの介護などの問題や、心の不安を抱えている患者さんに、食事の指導の前にどう接していけばよいか考えさせられます。高齢者の場合、情報が多いと混乱する場合がありますので、病状や栄養のことだけではなく、どんな些細な生活の事でも情報として医師・看護師に伝え、連携して患者さんの治療方針や目標を設定していく重要性、指導という立場よりも、人として患者さん1人ひとりにしっかりと向き合い関わることの大切さを実感しております。患者さんを支える家族やケアマネージャー・ヘルパーとの情報交換や栄養指導なども積極的にやっていたらと思っており、幾つかの症例から皆さんと一緒に考え、様々なご意見や体験談をお聞かせいただけたら幸いです。